

安政の大地震と一四代目川喜田石水の情報網

— 石水博物館蔵『はなしの種』について —

吉丸雄哉

要旨

公益財団法人石水博物館に現在収蔵されている一四代当主川喜田政明（号は石水）が安政の大地震について記した『はなしの種』という写本を紹介する。嘉永七年（安政元年）から一連の安政の大地震が発生するが、このうち嘉永七年六月一三日に発生した伊賀上野地震および同年一月四日の安政東海地震と五日の安政南海地震について書き残したのが『はなしの種』である。『はなしの種』はまず記された地震の状況が地震史料として大きな価値がある。また、射和の竹川家、伊豆にいた松浦武四郎、江戸店と往還の使用人などから政明のもとに地震の情報が入っている状況を確認することで、川喜田家が構築していた情報網を知ることができる。さらに、地震にまつわる狂歌を収録することで、災害に対して人々がどのような心情を抱いたかという地震文学としての考察ができることに価値がある。本稿は資料の書誌情報、構成、翻字を紹介し、解説を加えたものである。

はじめに

川喜田久太夫家は寛永年間（一六二四〜四四）より江戸の大伝馬町で木綿仲買から木綿問屋を営んだ豪商である。本拠地は藤堂藩の津城下にあった。川喜田家は本拠地の伊勢国から各地の営業店を指図した伊勢商人であり、津藩の田中家、松阪の長谷川家、小津家、長井家などとならぶ名家として数えられてきた。一八世紀以降、商売が順調であったため、

代々の当主は文化的な活動に携わるようになり、和歌・俳諧・国学・本草学・茶の湯に深い造詣を示した。一八代までの歴代当主が集めた古典籍・絵画・陶磁器などは、公益財団法人石水博物館に現在収蔵されている。

本稿ではそのうち一四代政明（号は石水）が安政の大地震について記した『はなしの種』という写本を紹介する。川喜田政明（石水）については、早川由美『歴代川喜田久太夫別称一覧』（私家版）によれば、

川喜田家14代政明。号、石水、孳々齋など。（文政4年（1821）生、明治12年（1879）没58歳）嘉永4年（1851）に29歳で家督を継ぐ。後妻が竹齋妹ゆか後にまさ。

と記される。江戸後期の生まれで、幕末に家督を継ぎ、明治初期まで活躍した人物である。政明は家督を継いで三年目の嘉永七年（安政元年）から一連の安政の大地震に遭遇した。このうち嘉永七年六月一三日に発生した伊賀上野地震および同年一月四日の安政東海地震と五日の安政南海地震について書き残し、『はなしの種』という冊子にまとめている。『はなしの種』は石水博物館所蔵資料で、従来まったく知られていなかった。『はなしの種』はさまざまな価値を含んでいる。まず、記された地震の状況は地震史料として大きな価値がある。また、射和の竹川家、伊豆にいた松浦武四郎、江戸店と往還の使用人などから政明のもとに地震の

情報が入っている状況を確認することで、川喜田家が構築していた情報網を知ることができる。さらに、地震にまつわる狂歌を収録することで、災害に対して人々がどのような心情を抱いたかという地震文学としての考察ができることに本資料の価値がある。

以下、資料の書誌情報、構成、翻字を紹介し、解説を加える。

書誌情報

『はなしの種』（登録番号…一八五一六『はなしの種後編』）

川喜田政明（石水）編。縦二三・九糎×横一六糎。表紙なし。仮綴じ。半丁につき一〇行の罫紙。巻首題「はなしの種後編」。全一七丁。公益財団法人石水博物館所蔵

石水博物館の登録書名は『はなしの種後編』である。一丁表の巻首題が「はなしの種 後編」とあるためだろう。しかし、一六丁表冒頭に「はなしの種」と記してある。一六丁の内容は伊賀上野地震の記録であり、全体での成立は早い。それに追加する意味で、「はなしの種 後編」として安政東海地震・安政南海地震の記録が前半に置かれていると思われる。よって、本書の名称は『はなしの種』が適当だと思われる。

構成

一丁表〜二丁表 一月四日から二月五日までの地震の記録。一月四日の安政東海地震と一月五日の安政南海地震とその余震を記す。
三丁表〜四丁裏二行目 「十一月四日昼前より夕迄三度津浪来 津町并々寺院破損高汐目録」 一月四日の地震と津波の被害を記す。 町方

の被害を町年寄が奉行所に報告したものの写し。『津市史』第2巻^{〔注1〕}と同じもの。

四丁裏 震災時に危険を防ぐ働きをした者たちへの奉行所の褒美の記録
五丁表〜七丁裏 「津領の郷方分」の津波による塩害や家屋の破損状況を記す。大庄屋たちがおそらく奉行所に報告したもの。『津市史』第2巻^{〔注2〕}
八丁表〜一〇丁表六行目 「町并々寺院郷中破損総数」「南勢山田」「松坂」の状況を記す。

伊勢は「神主足代より申来」とある。「右十一月七日書上」とあるのでかなり早く情報が伝わっている。

一〇丁表七行目〜一〇丁裏五行目 一月一六日付の御教書。

「当用録 朝喬卿公文所」（伊勢 神宮文庫）『新収日本地震史料 第五卷別巻五の一東海』^{〔注3〕}にも同様の文書。

一〇丁裏六行目より一月二七日の安政改元の記録。

一一丁表四行目より東海道筋の被害。「手代須兵衛見聞」。

一二丁表二〜六行目 「勢国 鳥羽城と堅野村」の被害。

一三丁表七行目より 「射和竹川より来書写」と射和の被害。妻が竹川竹斎の妹のため。「竹川竹斎日記」^{〔注4〕}と共通する部分がある。

一四丁表七行目より一四丁裏二行目 松浦武四郎からの書簡。伊豆下田の被害。

一五丁表 大坂川口津波届書写。

一六丁表〜一六丁裏二行目 「はなしの種」、伊賀上野地震の記録。余震のあった六月一三日から。

一七丁表・裏 改元と地震にまつわる狂歌。

解説

一月四日の安政東海地震と一月五日の安政南海地震および余震の記録は『津市史』巻二の記録「岡安定日記摘要」とたいへんよく似ている。岡安定は本業は魚問屋で、京都の山本亡羊に学んだ本草学者であり、安政の大地震について細かい記録を残した。『津市史』に収録された岡安定日記はたいへん詳細なこともあり、安政東海地震の分析史料に用いられている^(注5)。

相違では一丁表から二丁表までの地震の記録に津波・高潮の情報がない。津波・高潮の被害は次の「津領の郷方分」の被害にまとめられているが、これは報告書を見て写したものと思われる。地震の記録は天気や地震の度合いが細かいので体感した可能性が高いが、津波・高潮に関する記述がないのは気になるところである。また、同じく津城下においても『岡安定日記』と比べると、『はなしの種』九日の「曇雨」が『岡安定日記』では「曇折々照」など、震度の体感や天気の記録が若干異なる。藤堂藩の川喜田家本宅は津城下で海にほど近い分部町にあったのだが、より内陸側に避難していたのかもしれない。自身の居宅などの被害記録がないが、『はなしの種』という書名のつけ方からすれば、他人が読むことを前提にしてあえてここに記さなかったのかもしれない。

地震情報はおおよそ『岡安定日記』に共通するとはいえ、前近代では地震計ではなく体感で記されているため、地震情報が増えることは情報の精度を高めるのに有効である。その点で今回の『はなしの種』の紹介は地震研究のうえで重要といえる。

津波被害は、政明が有力な商人であったことからすれば、町方が奉行所に報告したものの写し、—おそらく原本に近いもの—、を見る機会があ

ったのだろう。同じく『津市史』に収録されているが、後述の波線部は『はなしの種』だけである。

また、四丁表の地震のさいに救難を行ったものの表彰の記録は他に見当たらない。

津のみならず、松阪や伊勢の被害状況が記されているのは川喜田家にとつてそれらが重要であることを示す。竹川竹斎からは詳細な被害報告を受けているが、単なる被害報告ではなくその後の援助への期待があったのかもしれない。竹斎が集めた松阪の被害はかなり早い。

東海道沿いの被害は江戸店へ送った手代の記録にある。急ぎの旅だがしっかりと状況が記されているのはそもそも被害状況をできれば記録しながら行くように命じられていたのだろう。

御教書の記録は神宮文庫の「当用録 朝喬卿公文所」などと同じである。改元にまつわる貴重な記録である。

松浦武四郎は嘉永七年は宇和島藩の家老吉見左膳に頼まれて下田の様子を調査に行っていた。当時、外国貿易にも興味を持っていた川喜田政明と松浦武四郎はやりとりがあり、松浦武四郎からの川喜田政明への書簡のうち原本があるものは『三雲町史』^(注6)に翻刻されているが、今回の手紙はそれに含まれておらず、原本も見当たらない新出書簡である。狂文・狂歌の部分は現代語訳をする。

居宅出張はさていやかな事、小屋はりつばて来る合羽持出しふとんになるよしず、あじな顔して世直して、ゆうべもゆるとてだまされた。こよいも水じやおこされた。おりくきのなひ小地震におまへと私はときをする。

(訳) 住むところが外になるのは本当に嫌な事。葭簀ばりの立派

な（皮肉）小屋に合羽を持ち出して蒲団にしている。気の利いた顔をして世直しして、夕べも地震が来ると言われて騙された。今晚も水が出ると言われて起こされた。ときどきお前と私はたいくつまぎれの話をする。

狂歌

地震めかおのがからたをもがくのは嘉永としをはかひてほしさに

（訳）地震めが自分自身のからだの手足をもだえ苦しんで動かすのは辛いところを搔いて欲しいからだ（嘉永の年号を変えて欲しいからだ）。

返し

自身では嘉永所え手がたらすかへてもらへはあととは安政

（訳）地震それ自身では辛い（嘉永）とところに手が届かない。年号を変えてもらえばあととは安心な世の中（安政）だ。
鹿嶋から手紙使てすむことに地しんときてはとんためいわく

（訳）要石のある鹿島神宮から手紙を出してもらえば済む用事に地震がおきてはたいへんな迷惑だ。

翻刻 はなしの種 後編

はなしの種 後編

十一月四日 朝五ツ式分五厘頃大地震。同七ツ過中地震。両度夜に入、小地震。五六度。但天気。

同五日 天気。暁六ツまへ中地震、小地震折々。同夕七ツ過頃、又大地震。夜に入、中地震三度計。小地震数度。但夕刻晴雨脚降。

同六日 天気。朝小地震三度計。昼後も折々有之、夕暮小地震有之。夜

中も両三度震。深更に至、雲出る。（二丁表）

同七日 朝雲雨。八ツ半頃より折々時雨降。四ツ頃中地震。夜中も中小一両度有之。

同八日 雲雨。小地震朝より午時迄に両度。夜に入、三度震。

同九日 雲雨。昼前小地震両度。夜に入、四五度内両度小なから強。

同十日 天気。あら風。昼前小震三度。同十一日 天気。あら風。

同十二日十三日 天気。小震一両度有。同十四日同四ツ過小三度震。

同十五日 天気。同十六日 天気。昼後、初雪降。

同十七日 天気。夜中小震両度。同十八日 天気。烈風。

同十九日廿日廿一日廿二日 天気。小震昼夜折々有。（二丁裏）

同廿三日 天気。小雲雨。小地震折々有之。同廿四日 同断。

同廿五日 暁六ツ半時小動両度。五ツ時中地震。曇天時化もやう。夜に入る頃、雨止。夜中も小動有。

同廿六日 曇天暖気。八ツ半過、中小位の地震有。

同廿七日廿八日 天気。烈風。同廿九日 天気。あら風。夕に止。小動折々あり。

十二月朔日 天気、昼後風出。同二日三日四日五日 天気。小動。夜に入、八ツ七ツ前後一両度又は三度宛有。（二丁表）

（二丁裏 白紙）

十一月四日昼前より夕迄三度津浪来。津町并に寺院破損高汐目録

一潰家 五拾軒

一半潰家 百拾五軒

一大破傾家 式拾式軒

一破損并傾家 式百八拾四軒

一傾長屋 式ヶ所

一 潰土蔵

拾式ヶ所

一 石燈籠倒損諸建物瓦落壁落等多分に御座候

一 半潰土蔵

卅式ヶ所

一流死人 式人 但女 築地町鍋屋娘

一 大破并破損土蔵

百九拾二ヶ所

同阿波屋下女

一 潰堂 南町妙雲寺山内 愛染堂 地藏堂

式ヶ所

外に式人 同町髪結の子

一 半潰堂 八幡町松原寺 弁才町教原寺撞鐘堂

式ヶ所

一人馬怪我無御座候

一 大傾大破堂 式ヶ所

式ヶ所

右の通に御座候以上

一 同大破客殿書院 七ヶ所 (三丁裏)

八ヶ所

寅十一月

町年寄共 (四丁表)

一 潰書院并に座敷附庫裏共

四ヶ所

御奉行所 一鳥目一ヶ分 片浜町木屋佐吉船頭 留吉

一 半潰書院同

八ヶ所

右は去る四日高汐の為岩田橋下に於て破舟難事の砌危き働いたし溢に者

一 大傾大破坐敷附庫裏共

八ヶ所

共助け候段寿情の至に付 右の通為褒美被下候事

一 潰門 寺町西来寺産所門

同上宮寺同

一 右同断 岩田橋詰髪結宗吉

一 同上宮寺同

同上宮寺同

一 鳥目五百分 完

一 同了然寺塔頭快東院

五ヶ所

伊与町岡本屋吉兵衛 佐吉舟水主 宗四郎

一 潰并半潰玄関

四ヶ所

同町新助奉公人大吉 出口 庄兵衛

一 同半潰小屋 但井戸屋形共

六拾式ヶ所

津領郷方之分

一 大破并傾小屋

式拾式ヶ所

専右門 (四丁裏)

一 潰并落庇 但廊下共

百卅四ヶ所

一 合畝數百八拾三町四反廿七歩

一 同 高塚 式拾壹ヶ所 (三丁裏)

三拾四ヶ所

内

一 潰雪隠

五軒

百七拾九町三反 汐入 本田新田畑

一 汐入家拾三軒内 床上迄 伊豫町

四軒

四町壹反廿七歩 泥吹出埋りゆり割山落 欠所本田畑 新田畑

一 床下迄 同

八軒

一 塩浜畝數七町余 砂入

一 分都町四軒

壹艘

一 湊切所合長 四百八拾壹間

一 破舟 但四拾瓦積磯端舟

式ヶ所

一 堤欠所合長 壹万九千八百五拾四間

一 石垣崩 贊崎

但田畑往還池所堤川堤道欠山欠

溝手欠所ゆり割摺下りとも（五丁表）

一 潰家	百七軒
一 半潰家	四百九拾貳軒
一 潰書院	五ヶ所
但座敷隠宅とも	
一 潰土蔵	四拾九ヶ所
但郷蔵物置蔵とも	
一 半潰土蔵	貳百五拾四ヶ所
但物置蔵破損土蔵とも	
一 潰小屋	百貳拾四ヶ所
但潰井戸屋形とも（五丁裏）	
一 半潰小屋	百廿六ヶ所
一 庇落	八拾貳ヶ所
但土蔵小屋庇共	
一 半潰堂	四ヶ所
但行者堂とも	
一 半潰庫裏	壹ヶ所
一 潰小堂	貳ヶ所
一 潰社	六ヶ所
但素庵手洗所とも	
一 半潰社	四ヶ所（六丁表）
一 潰門	九ヶ所
一 半潰門	三十ヶ所
一 潰高堀	三拾四ヶ所
一 半潰同	拾ヶ所

一 傾家

但堂并に土蔵小屋とも	貳百六軒
一 汐入家	四拾三軒
但貳拾八軒 床上迄	
拾五軒 床下迄	
一 潰雪隠	貳百卅七ヶ所（六丁裏）
一 半潰雪隠	百拾六ヶ所
一 橋落	拾五ヶ所
石橋 但一ヶ所破損共	拾三ヶ所
板橋	九ヶ所
土橋	壹ヶ所
一 水筒損	六拾五ヶ所
但流失とも	
一 山落	五拾七ヶ所
一 井堰落	貳ヶ所
但明吐堰落とも（七丁表）	
一 蔓損	四拾九ヶ所
但石蔓出蔓片蔓共	
一 漁舟小越船破損	貳艘
但流失とも	
一流出小屋 但汐釜小屋とも	貳ヶ所
一流留破損	百卅三ヶ所
一流出割木	老萬千四百九拾五把
一 怪我人	五人内 男四人
	女壹人

石燈籠損諸建物聊宛傾瓦破損壁損也、石垣崩等小破損共多分御座候（七丁裏）

一牛馬怪我

寅十一月

御奉行所

無御座候
大庄屋共

（津市史では寅十一月九日の報告としている。また「右之通御座候遂吟味書付差上申候以上」が『はなしの種』にはない）

町并に寺社郷中破損惣数

一合一潰家

一同半潰

一同破損傾家

一同土蔵潰

一同同破損半潰

一潰堂潰門潰書院 社共

一潰小屋

一汐入家

南勢山田

一潰家

一同

一半潰

一同

一大破家

一同

一潰土蔵

一半潰土蔵

一大破同

一破損同

一同家

一同

一倒門

一同納屋

一半潰同

一大破納屋

一外に半潰大破家

一同

師職家

一潰家半潰

一破損

百卅九軒

町家分

一潰半潰

一破損

合 百四拾弍ヶ所

合 三百三ヶ所

合 九拾五ヶ所

師職合 廿七ヶ所

町家合 百七拾五軒

師職合 拾七ヶ所

合 八拾弍ヶ所

七ヶ所

六十八ヶ所

師職合弍軒

町家廿七軒

三拾六軒

百參軒

九百弍軒

千百八拾軒

百弍千八拾弍軒

右は度会神主足代より申来（九丁裏）

松坂

一潰家

一半潰蔵

一半潰家

一怪我人

四拾四軒

四拾九ヶ所

四百五拾五ヶ所

弍人

（九丁裏）

合 三拾弍ヶ所（八丁裏）

右十一月七日書上

御教書写

当十一月四日五日等地震於近国四国東海道筋有地震津波等之聞、折々微震不止因之不被安 宸襟之間此後弥無事天下泰平（十丁表）万民平穩之御祈一七箇日之間一社同可抽、丹誠之旨、御教書如此早可被告知、二宮之状如件。

十一月十六日

祭主三位判

大司宿館

太神宮司

可早令承知改元事

右今月廿七日改嘉永七年為安政元年此旨且存知且令相触神宮弥可抽 宝
祚長久国家安全之懇祈之状如件以下（十丁裏）

安政元年十一月二十七日

祭主神祇大副伊勢權大中臣判（十一丁表三行目）

東海道筋 手代須兵衛見聞

一宮駅 浜辺伝馬町筋少々痛東へ入口式丁程潰れ

○笠寺 少々破損潰家有之候

一鳴海 一池鯉鮒 少々痛

一岡崎 少々痛 一矢作橋 手前少々潰、橋式ヶ所程痛

一藤川 ○赤坂 ○御油 少々痛

一吉田 三分通痛少々潰有之（十一丁表）

一二川 ○白須賀 式三分通そんじ

一荒井 御関所打浪にて流宿内五分通痛

一舞坂 地震にて少々痛打浪にて浜通大變の痛

一浜松 御城内始宿内三分通痛

一見附 中破損但し袋井迄丸潰丸やけ

一袋井 地震其上不残焼失、但し此間も丸潰、丸やけ多し

一懸川 右同断、御城潰同断、但し此間にも丸潰丸やけあり

一日坂 小地震少々そんじ

一金谷 三分通潰大破損 一嶋田 上におなし

一藤枝 右同断 出多震御城丸潰御飯屋住居（十二丁裏）

一岡部 西の方少々潰宿内少々痛

一鞠子 少々痛

一府中 宿内三分通焼失其外式分通潰、御城潰御家中同断火は江川町

より出

一江尻 丸潰丸やけ 一奥津 少々痛、少々潰

一由井 少々痛、一蒲原 問屋より西方丸焼、東の方丸潰

一吉原 半やけ半潰

○吉原より原迄在中無難 ○岩淵 丸潰焼失

一原より沼津迄 先無難 ○在々村々同断

○藤川 四日地震より式時程無水、夫より吉原まで村々丸つふれ

一沼津 半潰十三日夜大手先三分通やける（十二丁表）

一三嶋 丸潰明神前式丁程焼失

三嶋上り口 ○塚原○一ノ谷○三ツ家○さゝ原○山中 何れも半潰

一箱根 式分通潰跡不残半潰、御関所御無難

○畑湯本 少々痛

○三枚橋より小田原迄 ○小田原より江戸迄 先無難

右の通に御座候尤其外間の宿在々委細相知れ不申、尤夜中通行の候所は

猶以しかと見る不申何分主家へ(十二丁裏)
道を急ぎ候に付駕迄替立にて書留不申候

勢国

一 鳥羽御城三ノ丸迄汐参る四度 射和庄屋逗留旅宿床上三尺に及
堅神村 鳥羽の手前也 式拾軒計家蔵流失

一 射和竹川より来書写

拙家 北庭六尺燈籠丸倒同大の方は無別条 隠居庭五尺一本丸倒式本丸
(原文〇) 落 座敷からかべすみくふくれ破は無之
本家 乾蔵八巻落所へ響破入る。(十三丁表)

庭の中燈籠倒。

山本宅 蔵鉢巻落。とふろう同断。

延命寺 表石垣高さ三間計の所、八間計崩。但時年水後増築の所也。

いふく寺 同門前左右大半崩れ土塀崩。石碑大分たをれ

団子勘兵衛宅 うら土塀三間計崩、但老丈計石垣出る

相可西村等 右の塀、石垣等無別条土塀そんじ。

大六より大三表迄 破所入る

浄土寺 川の上の石垣三、四間の処崩、川え落る。(十三丁裏)

中間(万) 竹口 醤油 燈籠三本たをれ新竹込の方五六状計つゝあふれ
四本計也。日数強く分は滅しなれる無別条。

同寺之 土塀崩石塀多くなをれ。

平谷道山の道 われ口あく

一 松浦竹四郎 豆州下田湊松本十兵衛様旅宿よりの使
今般御機嫌能目出度奉る候。異国せん半つふれに相成候。下田は百軒丸

つふれ。まんまと私は死ませんた。

十一月五日 恐惶謹言(十四丁表)

竹四郎

石水雅君 くわしく後便に申上候。(十四丁裏 二行目)

大坂川口津波届書写

一 死人 三百拾式人 内 男六拾式人 女百五拾人

一 生死不知 六拾四人 内 男十六人 女四拾八人

右御奉行所へ届有之候分外に檢使の節隠の分又他所の者共幾千人ても不
相分候

一 海船廻船 千百拾八艘

内 千石拾八艘 破船百五拾六艘 損舟五百六艘 小損又無難 四百五拾

六艘

一 川舟 六百三拾艘 破舟五百六拾八艘(十五丁表)

(十五丁裏白紙)

はなしの種

嘉永七年甲寅六月十三日 天氣。昼後八ツ比より雷鳴。大夕立。雨間に

中地震式ツ。

六月十四日 暁六ツ過大夕立小雷脚有之。早々夜止。昼後雲出。無程快
晴え。同夕色虹月前にあらはれる。夜に入、八ツ時大地震。従先年は三
拾六年目(文政十二年の大地震からみて)。

同十五日 快晴。折々中地震小地震有之。昼後七ツ過より夜九ツ過迄相

止。夕暮夕立夜四ツ前より暁迄折々小動有。

同十六日 天氣。明五ツ過前後小地震。夕六ツ過前中地震。夜に入、五
ツ時又震。小夕立も有之。但昼後は午天氣雲雨。

同十七日 曇天。折々夕立有、明六ツ過。中地震。昼九ツ時（**十六丁表**）過迄三ツ計、中地震有之。夕七ツ半比大分強。夜に入、五ツ時四ツ時八ツ時前、明方にも震。（**十六丁裏二行目**）

居宅出張はさていやな事、小屋はりつばて来る合羽持出しふとんになるよし、あじな顔して世直して、ゆうべもゆるとでたまされた。こよいも水じやおこされた。おりくくきのなひ小地震におまへと私はとぎをする。

狂歌

地震めかおのがからたをもがくのは嘉永としをはかひてほしさに返し

自身では嘉永所え手がたらす（**十七丁表**）かへてもらへはあととは安政鹿嶋から手紙使てすむことに地しんときてはとんだためいわく（**十七丁裏**）

注

（注1）梅原三千・西田重嗣編『津市史』第二卷（津市役所、昭和三五）。七七三～七七五頁。

（注2）注1前掲書、七七五～七七八頁。

（注3）『当用録 朝喬卿公文所』の原本は神宮文庫所蔵。東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第五卷別巻五ノ一 東海』（東京大学地震研究所、昭和六一）一一八〇頁。

（注4）『竹川竹齋日記』（原本は松阪市射和松阪市史編纂室）（注3前掲書収録）二二六一頁。

（注5）東京大学地震研究所『歴史地震』二〇号（平成一七）に収録される次の論文が科学的な安政東海地震・安政南海地震の分析を行っている。都司嘉宣「講演記録 三重県の歴史地震と津波」三～七頁。行谷佑一・都司嘉宣「宝永（一

七〇七）・安政東海（一八五四）地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布（三三～五六頁。羽鳥徳太郎「伊勢湾岸市街地における安政東海津波（一八五四）の浸水状況」五七～六四頁。

（注6）三雲町史編集委員会編『三雲町史』第3巻資料編2（三雲町、平成二二）。

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）「石水博物館蔵資料を中心とした伊勢商人の文化サロンに関する総合的研究」（研究代表者岡本聡。研究課題18K00299）の成果によるものである。